

教育目標: ・健康な子ども ・進んで学ぶ子ども ・心の豊かな子ども ・よく働きなしとげる子ども ・考えくふうすることも めざす学校像: 心づくり、体づくり、学びづくり、協働による人づくりを实践する学校 めざす児童像: 3つの「あい」に一生懸命取り組んでいる子供(あいさつ、アイデア、高め合い) めざす教師像: 「法の遵守とサービスの厳正」、「プロとしての自覚と使命感」、「組織人としての言動」、「公務員としての社会性・協調性・コミュニケーション能力」を兼ね備えた教師
--

領域	中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標		成果指標		分析コメント	改善策
				中間	最終	中間	最終		
心づくり	すべての人を大切に する人権意識を醸成し、共感的な人間関係を育む。	相手を思いやり、命を大切に する豊かな心を育てる。	ふれあい月間、人権月間 を活用、挨拶励行や言語 環境を整える取組を工夫 し実施する。	4	4	3	4	全教職員で挨拶励行に努め、学級・学年・学校全体として 重点的指導を年間を通して行った。児童アンケートでも肯定 的回答が大部分を占めているが、中間アンケートと比較 するとポイントを下げている背景を分析し、対応していく ことが課題である。また否定的回答をしている児童へのア プローチについて工夫すべき課題である。	教員の人権意識を高め、一人一人を大切に する姿勢から学校全体として 人を思いやる心を育んでいく。児童会活動を中心として児童発信の 様々な取組を充実させるためにもどの児童にとっても魅力ある内容とな る工夫が必要である。また、小中連携の視点からの取組の充実を図る必要 もある。
		学校・学級の帰属意識 を高め、自己肯定感を 醸成する。	学級活動・学級会・縦割り 班活動等特別活動の充 実を図り、自他の良さを伸 長させる。	4	4	4	4	児童アンケートでは、90%を超える肯定的回答が得られ た。縦割り活動を中心とした異学年交流を年間通じて行う ことができたことで、児童の帰属意識を高めることにつな がった。学級活動・委員会活動・クラブ活動の充実を進め ているところではあるため、全教職員が児童に関わりをも ち豊かな人間性を育む必要がある。	国分寺市「すべての人を大切に するまち宣言」を意識 した学校全体としての取組の 充実を一層図る必要がある。 縦割り班活動をはじめ、学級 活動・委員会活動・クラブ活 動などを様々な特別活動を充 実させ今後も全教職員が児童 と関わりをもつことで、自他 の良さに気付き伸ばさせてい く環境づくりに努める。
学びづくり	主体的・対話的で深い 学びを实践し、確かな 学力を育成する。	問題解決的な学習を重視し、 主体的な学びにつながるよう 授業改善を図る。	単元を意識した学習計画 をもとに、児童に見通しを もたせ、「できる」「わかる」 授業を展開する。	4	4	3	3	校内研究を通じ、問題解決的な 学習の充実を図るべき授業 改善を継続的に行ったことで 児童が主体的に学習に取り組 む姿が見られるようになった。 その一方で児童アンケート 「自分なりに考えたり、自分 の考えを発表したりしました か。」の項目に否定的回答を している児童も一定数存在す る。	どの児童にとっても、「できる」 「わかる」授業を展開するた めに、指導過程・指導場面の 工夫を行っていく必要がある。 タブレット端末を活用した 個別最適な学び、協働的な学 びを通して、教員の授業力向 上と児童の学習意欲の向上の 両側面から主体的・対話的で 深い学びの実践さらに学力定 着に迫っていく必要がある。
		タブレット端末を効果的に 活用し、情報活用能力を育 成する。	学習場面でタブレット端末 を日常的に活用し、情報活用 能力を育成するとともに、 深い学びをめざす。	4	4	2	2	日常的なタブレット端末利用 については、教員・児童共に 肯定的回答が多く、年間を通 じて活用場面を設定できたこ とを考える。保護者アンケー トでは、中間では否定的回答 が肯定的回答を上回ったが、 最終では逆転しており、保護 者理解は進んだとは言えるが 、十分ではなく、より効果的 な活用を進めていくことは急 務である。	来年度以降、タブレット端末 の活用については、日常的な 活用から効果的な活用へと視 点を交換させていく必要がある。 情報モラルについての指導 を継続的かつ必要に応じて重 点的に行い、児童にとっても 有用なものとして活用場面を 増やす必要がある。また、効 果的な活用について保護者・ 地域に発信していく工夫も必 要である。
体づくり	自ら体を動かすとともに、 すすんで健康な生活を 送ろうとする態度を育成 する。	運動の日常化や体力の 維持向上を図る。	外遊びの励行、運動量を 確保した体育授業、体力 調査結果に基づいた取組 を実施する。	4	4	3	3	学級でクラス遊びを設定す ることや、教員が外遊びの 励行を呼びかけ自ら児童と 共に外遊びを行うことで、 運動量の確保につながった。 一方で、室内で過ごすこと が日常化している児童もお り、二極化が見られる。体 力調査の結果を分析し、児 童の傾向をつかみ、学校と して体力向上を図ることが 課題である。	体育の授業を基盤として、 体を動かすことの楽しさを 実感できるよう指導の工夫 を行う。「元気アップ月間」 を充実させ、一校一取組と しての縄跳びの取組と合わ せ、健康・安全についての 指導の充実なども図ってい く必要がある。
		日常生活習慣の指導 を図り、心身の健康への 意識向上を図る。	「早寝、早起き、朝ごはん」 をスローガンに掲げ、児童・ 保護者に啓発を図る。また、 食育を意図した取組を年間 2回実施する。	2	3	4	4	児童アンケートでは肯定的 回答が93%と高い水準を得 られた背景に、保護者アン ケート回答から保護者の意 識の高さが影響していると 考えられる。引き続き家庭 からの協力を得ながら生活 習慣の定着を目指したい。 一方で、教員の食育活動の 取組について、実施回数は 増加しているがより一層の 機会確保と指導の充実を図 る必要があると感じている。	今年度当初の保護者会で、 保護者への啓発を図ったこ とが高評価につながったと 考えられるため、次年度も 家庭からの協力を得ながら 児童自身の健康への意識の 向上を図っていく。また、 地域人材・教材を活用した 食育活動の推進を系統的に 行い、学校として食育活動 の機会の確保と充実を図る 必要がある。
協働	コミュニティ・スクールと して、開かれた学校づく りを推進・充実させる。	学校情報の発信に努 め、学校の見える化を推 進する。	学校だよりをはじめ各種 たより、学校公開、保護者 会、ブログの充実を図る。 CS協議会を中心とした地 域との連携を深める。	4	3	4	3	努力指標・成果指標とも中 間より評価が下がった項目 である。教員からは、学級 便りの発行などにより情報 発信を図る工夫ができてい なかったとの意見があった。 年度途中より学校便りなど をメール送信したことが、 成果指標を下げる原因とな っているかどうかは検証する 必要がある。一方で児童ア ンケート「地域の行事に参 加したり、地域の人と仲良 しくしたりすることができ ましたか。」の肯定的回答 は増加した。	CS事業を核とした地域参 画型授業の実施をきっかけ として、地域を知り、地域 に学ぶ機会を創出できたこ とで児童アンケートの回答 につながったと考えられる。 引き続き機会を確保すると ともに、国分寺学の実施 を通して地域に親しみ、地 域に学び、地域を考える 児童の育成を目指す。また、 保護者ボランティアをさら に充実させ、コミュニティ・ スクールとして地域と共に 学校教育の充実を図って いく。